

Ⅶ 第5分科会の概要

テーマ：震災ボランティアと若者たち ～その学びと支援を考える～

開催日 平成23年11月5日（土）～6日（日）

会場 旧文部省庁舎6階 第二講堂

趣旨・概要

震災ボランティアとして現地で活動している若者や支援者である行政・NPO及びこれから参加を希望する学生等を対象に、活動を通じた若者の成長や学びと今後 の可能性について研究協議するとともに、次代を担う若者等のネットワークづくり を進めました。

分科会内容

平成23年11月5日（土）

(1) トークセッション

「東日本大震災から240日、若者たちと震災ボランティア」





■田村 太郎 氏（東日本大震災復興対策本部事務局ボランティア班企画官）

（主な内容）

- 震災ボランティアは直後の物資提供や泥かき、片づけがあまりにも分かりやすいので、そこにばかり注目する。しかしながら、これからおそらく2年以上続く仮設住宅での生活をどうやって乗り切っていくのかが重要である。
- 地域にいる中高生たちが中心になって、これからの復興を議論していくことが大事である。6月に石巻で復興を議論するワークショップを開催したが、大人が出す復興アイディアは当たり障りのないものが多くて面白くない。中高生の自分たちの住みたいまちは、本当に具体的で面白かった。
- 先ず行動してみることが非常に大切で、それが許されるのが若者ではないか。行動する人が評価される社会にならないといけない。それが独りよがりかどうか、やってみないと分からないこともある。



■古賀 正義 氏（中央大学教授）

（主な内容）

- 若者たちの支援活動は有意義だったが、ネット上で「スラックティブズム」と呼ばれるような、実際には何の役にも立たないことをしているにもかかわらず、貢献したつもりだけになるというような問題や、仲間がやっているからということで、仲間だけで盛り上がってしまうという問題も生み出していた。
- 震災後、多くの地方や地域で、地に足の着いた支援も始まっている。経済的支援と精神的支援の両面を見つめてボランティアをしようという動きである。最後まで生活再建支援をスローガンにしながら、独りよがりでない、被災者の現状にあった支援を試みている。
- ボランティアを通じて、問題を抱えた方々の気持ちと自分の弱さを体験することが重要である。自分自身もこの問題に立ったらどれほど弱いだろう（「バルネラブル」な存在）ということを感じないと、ボランティアがスタートできない。問題の当事者の気持ちを共に持ちつつ、支援をしていくということが、常に原点である。



(2) 現地報告

若者たちの活動と学び

■伊藤 航 氏（学生団体 福島大学災害ボランティアセンター）

（主な内容）

- 仮設住宅の集会所を借用して足湯活動を行っている。足湯に浸かっている時に、ハンドマッサージをしながら会話して、その内容を「つぶやきカード」に記録する。この「つぶやきカード」を行ってから、例えば避難している方の悩みや、心に傷を負った方の思いを足湯活動が聞く場になっている。



■上田 英司 氏（NPO法人NICE事務局長）

（主な内容）

- 活動の4つの特徴は、①現地宿泊型でグループ活動している、②大学生を中心とした若者が主体のボランティア組織である、③2週間サイクルの活動を継続して実施する、④必ずボランティアコーディネーターを通すことである。
- 今回の災害ボランティアで一番大きな学びは、家族だったり、地域だったり、今まで忘れていたものを、被災された方々が本当に助け合って生きていくという姿を、若者が目の当たりにしたこと。この学びは知識を得たり、人生経験をつんだり、そういった以上の哲学的な意味合いを若者たちにもたらした。



■西尾 雄志 氏（日本財団学生ボランティアセンター センター長）

（主な内容）

- 大人数で作業すれば、片付くのは片付くだろうが、被災者の心への響き方が、学生とそのほかの者では違うのではないか。
- 内閣府の調査によると、社会の役に立ちたいという若者が、およそ30年前の倍近くになっている。役に立ちたいと思っているけど、実際にやっているのかというかなり数が減ってしまう。これが学生ボランティア支援の大きなポイントになっていくのではないか。





(3) 熟議（ワークショップ）

若者の震災ボランティアの経験と学びや関係機関・団体の支援方策、今後のボランティア活動の在り方と支援について熟議しました。



熟議で出された主なコメント



【若者にとって震災ボランティアの経験と学びとは？】

- 相手のために何ができるのか本気で考える機会
- 生活しやすい街のづくり方が見える
- 初めて他者を意識する経験
- 適度な使命感
- 自分のこれからにとって、自信の源となるもの
- 知らない自分を発見できる



【経験と学びをいかに共有しネットワーク化していくか？】

- SNSを利用した日々の細かい連絡の取り合い
- 作成したもの、使用したもののデータをいつでも見られるようにしておく
- 全国規模の既存の団体と協力して対面できる場づくり
- 定期的に顔を合わせることで仲間意識の共有



【若者ならではの役割とは？】

- トライアル&エラーができる
- 三世代交流のかなめ
- 子どもに近い存在
- 深く考えすぎずに行動できる
- 新しい公共の担い手

平成23年11月6日（日）

(4) 震災ボランティアネットワークセッション

学校や学生団体、NPO法人など18団体がブースを出展し、活動を紹介するとともに、参加者間のネットワークづくりを進めました。



● 出典団体等によるポスター例



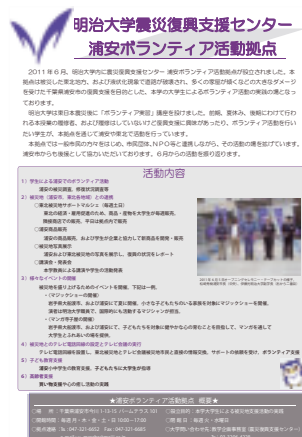
岩手県立大学学生ボランティアセンター
(いわてG I N G A - N E Tプロジェクト)



S Y D (公益財団法人修養団)
(活動の様子)



独立行政法人国立青少年教育振興機構
(国立青少年教育振興機構の取組)



明治大学震災復興支援センター浦安ボランティア活動拠点
(明治大学の震災ボランティア活動)



● 出典団体

No	団体名称	テーマ
1	岩手県立大学学生ボランティアセンター (いわてG I N G A - N E Tプロジェクト)	いわてG I N G A - N E Tプロジェクト
2	宮城教育大学教育復興支援センター	教育復興支援ボランティア活動について
3	学生団体福島大学災害ボランティアセンター	学生団体福島大学災害ボランティアセンターのこれまでの活動
4	NPO法人東京学芸大学こども未来研究所	教育支援人材認証制度と被災地支援
5	千葉大学ボランティア活動支援センター	千葉大学ボランティア活動支援センターの取組
6	明治大学震災復興支援センター浦安ボランティア活動拠点	明治大学の震災ボランティア活動
7	三重学生災害支援団体 t e a m M	三重と福島のつながり
8	京都災害ボランティア支援センター	公と民の平素からの協働
9	大阪国際大学国際コミュニケーション学部 コミュニケーション学科渡邊ゼミⅢ	がんばろう日本! ~今、観光を学ぶ学生に出来ること~
10	全国大学生生活協同組合連合会大学生協ボランティアセンター	全国の大学生と取り組むボランティア活動
11	岩手県大船渡市立第一中学校	中学生による被災地からの「希望」発信
12	NPO法人遠野まごころネット	被災地にできること、遠方からできること
13	NPO法人キッズデザイン協議会(KDA)	キッズデザイン復校支援プロジェクト
14	RQ市民災害救援センター	人と人をつなぐ支援活動ネットワーク
15	NPO法人N I C E (日本国際ワークキャンプセンター)	ワークキャンプによる災害ボランティア
16	日本財団学生ボランティアセンター	東日本大震災学生ボランティアチーム「ながづつ」
17	独立行政法人国立青少年教育振興機構	国立青少年教育振興機構の取組
18	SYD (公益財団法人修養団)	L o v e i s A c t i o n

(5) クロージングシンポジウム

「震災ボランティアと若者たち、その在り方と支援を考える」

大学やNPO法人等の若者を支援する機関・団体の視点から、ボランティアを通じた若者の学びと支援方策について協議しました。

■コーディネーター:

松田 恵示 氏 (東京学芸大学教授)

(主な内容)

- 学生ボランティアを「支える」うえで3つの課題がある。①ボランティアをしたい若者と、ボランティアを必要とする場所をいかに結びつけるかというマッチングの問題。②ニートやひきこもりなど参加者の多様性や経験をどう支えていくか。③震災ボランティアとして活躍した若者たちが今後どこへいくのかという時間軸の問題。



■シンポジスト:

上田 英司 氏 (NPO法人NICE 事務局長)

(主な内容)

- 災害ボランティアから、日常のボランティア活動につながる学生たちと、つながらない学生たちの違いはなんだろうかというのを議論しなければいけない。どういう大人がいれば日常的な活動につながるのかということもひとつの出発点になるのではないかな。



多田 一彦 氏 (遠野まごころネット副代表)

(主な内容)

- 災害からも学習しなければいけない。それが何につながるのかというと「応用力」。次に使う、活かすということが大事である。良い検証をすれば、良いビジョンができ、ビジョンがきちんとしなければ制度ができていかない。制度は使えるだけでは駄目で、使う側が使う気になるものでなければならない。



白川 優治 氏 (千葉大学普遍教育センター 助教)

(主な内容)

- 学生は、被災地域でのボランティア活動を通じて、専門的な知識や能力、主体的な役割を果たすための力量を、まだ持っていないことに気付く。今の自分ができることの限界を知り、無力さに気付くことがボランティア活動を通じて見られる。このことは、「自分がもっと学んで何か身に着けるべきことがあるのではないかな」、「学ぶことによって自分のできることが増えるのではないかな」との自覚につながる。





中村 みどり 氏（立教大学ボランティアセンターコーディネーター）
(主な内容)

- 支援する姿勢として、共に生きることを大切にしたい支援を行なう。
社会で生きるあらゆる人たち、あらゆる境遇におかれた人たちと共に、
一緒に生きているという実感、それを大切にしたい支援を行なっていく。



西尾 雄志 氏（日本財団学生ボランティアセンター センター長）
(主な内容)

- なぜ、学生ボランティアを支援していく必要があるかというと、ポイントは2つ。①学生時代、心を痛めて被災地でボランティア活動したというマインドを持った人材を多く社会に輩出していくことで、それが社会の底力となって復興への大きな力になる。②学生ボランティアの場合、支援する者と支援される者がイーブンの形にもっていくことができやすい。
- 同じガレキ撤去の作業であっても、大人が行うのと若者が行うのでは、被災者の心への響き方が異なる。若者は大きなメッセージ性やシンボル性を持っており、被災者が復興しようとする意欲を高めるような影響力がある。

